太田道灌雄飛録

三

へ13
3915
3

門 へ13
號 3915
卷 3

本大學出版部

太田道灌雄飛錄卷之三

目錄

一 千葉城亂直父子生害のる〻事 子葉二流となる事
一 太田持資家督相續扇ヶ谷を補佐もる事
一 太田持資武州豐嶋郡に城を築くる事 五山の學者詩文を贈る事
附 河越の城を移もる事
一 東の常緣京都の傘より下總國へ下るる事 馬加義城の事
附 東國の將士不ク蜂起の事
一 足利政知東國の主として下向の事

述懐の前内府殿へ

源持資

君にあき民にあはれ朝夕に
つくしとなれる方ぞなつかき

太田道灌雄飛録巻之三

東都　木村梅年忠貞編緝

○千葉落城胤直父子生害并千葉二流となる事

こゝに又千葉介胤直が家長よ。原胤後守流房同胤後守流氏国協寺下野守尚任といふ者あり。昔ふ有勢の名ありて。中ゆも石毛流房ハ武功の者云ゆく。所領おゝ其主千葉よりハ多くして関東の千葉。千葉の原とゆひ〳〵とぞ。ハ流房ハ陰られども。所へもとゝく生仕せ〳〵ゑゞ。成氏ゝ胤房を頼よ由頼ゝあるゝ。胤房所の中ゆも恐上ゞく。千葉介胤直よ猛く勢りく。所方ゆゝりのくとゞゆきる。又国協寺下野守ハ上杉ゝかゝつもとれば。同名の者代りよ。流ゆゞさまゞく小藤ゝゝゝゝ。胤直ゝとゝゝ所ゝ逆ゝみゝしゆゝ。千葉介よりゝ

上杉に合躰して御所方を背きたる原胤房かくて我が領分をわかちひざる
胤直君臣の義ハ是までなり。其義なしと思ひ知らせやさんと。家子に成
氏へも加勢をまかるべし。一戦に打亡しはさんとやうかれバ御所よりも
加勢を遣さる。胤房大に悦びく。同年三月廿日千葉の城へぞ押よせ
たり。胤直城の事ゆくなりたるを。そろぐならぬ手もあしべ。いさんとも
ふせぐ手だてなく。くの多ふの城を没落して同じ多古。志摩の二城に楯籠ル。
一味の兵を催しよ上杉の加勢を待てぞありたる。然るに故千葉大介
満胤が二男よつの馬加陸奥守康胤ハ道常輝。其子三郎胤持とて
ものあり。是又兼てより御所方に志ありたれバ。父子ともに加はり討て出。然氏の
味方をやし。原胤房にお加える。越後守大に悦びく々かの大将として。
胡の城へさし向け。胤房ハ志摩の城へ押よせて多古一番二に坂[illegible]

一つ事ととく会…みなむとえかの家…よくのうえ…こじ私…家雲の場所に…堂ふれハおのかときんまうて侍し…つゞけ…紙…うそのせて…後の宝の梓世とあり

城へ向ひたる馬加入道ハ古宮ふくなりければ城をとり巻き種の道を止め
て一方をバ開ざさと明けく攻かゝれバ城兵ども操ま走しくぬけくに落失て
なり。城将千葉二郎胤宣ハ若年といひ殊に勢ひんとなる者なり漸くに
二十騎ゆへ逼ぶりしかバ戦ひ勤ひもなく。討死せんよりハ潔く自害しなく
首級を敵の道路へ渡しせんと。則乳母子圓城寺藤五郎直時をよりて
敵陣へ使遣をおくへ。城を明けはてしなくとたる佛前にて切腹してうきたる由
を申入るゝに光の事なりとくく城を請充寄手並びよ御所よりの加勢の兵
ども。是を送りて城下の武徳といふ所よ。阿弥陀堂のありけるまぞへ入りける。
斯て胤宣ハ心静に佛に向ひて焼香し。料紙硯を乞ひく。
うごきなむ人を儞慕の辞世や書きそれ給ども両人ともにゆき
つゝくなげおせてそつらへ人あしたるまよ向けて あむしあみだぶつ

し書綴り残りなくいさぎよく肌おし脱ぎ腹一文字にかき切りしハ円頂なる僧
の節とかめでたる流石におぼへて苦痛ハ忍びしと介錯し返す刀に縦ざまに切
おのれと喉へ突立し鍔もとまで貫かれてぞ死しけることまことに流宜
に附添ひ来りし椎名小十郎。流家木内彦十郎。遠城三郎。出井彦太。
栗飯原九郎。池内勘十郎。深山弥平郎。寺本喜八。青野新九郎。冬固孫八。
高田源八。三谷新十。寺本弥七。中野与四郎までさし違へて。枕をならべて討
うち死ぬ。是によりて首級をとりおせ太氏ハ進上に入。嗚呼惜いかな二郎
流宜生年ようやく十九歳才智衆に超えて武勇も又備りしが不慮の
軍起りて。享徳四年八月十二日主従ともに秋風のさそふまゝきえ行くもちら
露ときえ武術をのこしける。此堂の別当来照院亮修を請じ
読経焼香して。其後のつとめ懇ろにぞ供養しけり。さて又忘れ乃

城へハ原越後守大将となりて昼夜をわかたず攻めたりしが。同年八月
十四日の夜終にかゝりてぞ攻落されぬ。是も討死して家人ひとりき。如来堂の
別当東覚院の親る。別て越後守が城をうけ光彼手紙失くとうかがひ流
直が側近く召つかはれたる上臈女房をはねきくやもうちハ今度の中手ハ太氏の
ゆかりあれバとて。討手の者さし越されしにぞよくれば心中くうち難く力およばぬ也。
老臣流宜のゆかりは最初より忍一筋にやみもくまなく。何の不儀もあるまじ
きさに馬加どのゆるし候ふみばしらせ命を助け給ひしせいかん
との義ふゆとせさ。彼女房涙ながら老臣へもやるせぬる十二日。宝の宮に有
しとやきれべる弓矢く越後なるも。そゞろに涙を流しける。明くれバ八月十五日
寄せてあまざんくに重なり。如来堂の稲麻竹葦と迫る関の声をぞ揚げたり
る。千葉胤直入道常瑞。舎弟中務入道了心。同時に腹を切りたり。池内豊後守

亂相分錯して切腹せ。国坂寺国情る。[illegible]門尉。池田義人。[illegible]田伊豫守。
要殺[illegible]を後の尉。[illegible]田中勢亟流[illegible]の[illegible]亂亟の奥[illegible]び上[illegible]
女房達さ[illegible]殺[illegible]ひくゝ後[illegible]切る。あ[illegible]
[illegible]隆死骸を葬る。佛事然養[illegible]あ[illegible]長常の煙[illegible]焼上[illegible]
守流義。[illegible]年頃の恩[illegible]遺骨を千葉乃
大日寺[illegible]。五輪の石塔[illegible]敵[illegible]
[illegible]情あ[illegible]人[illegible]感[illegible]
事なり。下総の金剛授寺[illegible]僧[illegible]中納言の坊[illegible]
書の[illegible]。二郎流宣[illegible]
[illegible]亂[illegible]害の[illegible]
[illegible]

[illegible]辭世の歌[illegible]
世歌[illegible]
一首の歌を書つけて[illegible]
つひに空[illegible]

[illegible]
下総の[illegible]
男武[illegible]
流頼[illegible]

を領し哥道をかゝく其名高し。始めより禁中に召されて代々天皇に
勤仕す。常流より分かれて時流といふ。在原繁意の息男其子杉流と
號す。小倉に住し。馬場に大日堂を建立し。頼流の子宗流。宗流の子貞清
の子孫武蔵の千葉へ移住されども大日の像は捻世所に残し置されたる。貞
流その子氏流とも小堂を住す時。夢想国師の弟子たる古天和尚の請
によりて寺の中興開山となし。是を持するの今の万満寺なり。宗流は三井
寺に住し。貞流は宮方にくみありし由。北国落までは新田義貞に
属してありけるが。今しも宗氏の味方となる。宗流の一男流貞は宮方にて
下総の千葉に残る。此人の子日祐上人は法華宗の学匠にて。同国中山
法華経寺の中興開山なり。さるより流貞より中山の七堂建立ありて
五重の塔婆を建立る。その後流貞上洛して。吉野の皇居へまゐり。征西

将軍の宮。筑紫へ御下向の時供奉して九州へ下り大隅守に任ぜられ肥前
の國をも知行しまゐり日祐も九州へ下り肥前國松尾山を建立して中山
を引きまはの世すぐも妙顕と中山とあしきなりとぞ。是より
貞流の子氏流。千葉へ移り流直まで五代なり。宗氏の領千葉に両流と成
宮方將軍方とてありしが。宮方は九州へ下り終に下総へ帰りし。関東を
一統ありしが。今なほ馬加康流は道胤所为とありて原の一族どもは道
を主人と仰ぎ千葉へ移りて家を續きぬ。是より系も小金の城に居住さす。
かゝりしかば上杉方よりも今の兄流に同じく討死せし。中務は道了
也の子息右京亮實流二郎貞流の両人を立て下総國市川の城にこもらせ
今までは千葉の旧臣おのおのひくふ両家へ勤仕し。けふまた千葉は二流
となりけるとぞ。

圓城寺藤五郎
千葉小二郎亂宣

亂宣が郎等
千葉小二郎亂宣
生年十五才多胡の
城に籠り伯父る加
入道を責られ落城し
宮殿の和歌を詠て
生害する図

○太田持資家督相續扇か谷の補佐をする事

爰にまた太田備中守資清入道道眞ハ去ぬる享徳三年甲戌より扇か谷と
ともに御所方と嶋河原におひて励くたゝかひ。味方を救ひまゐらせしかども。上
杉方敗軍しつゝ上野國白井へ引退きけれバ。道眞も河越へ引こもりぬ。その
後ハ御方とやゝしく出陣なく。家にゐて兵粮を貯へ軍士の練てぞ居たりけり
又かゝれバ子息源六郎持資ちや二十四歳なり。道眞ある日持資を
呼ていひけるハ。我つら〳〵當時の形勢を観察するに。君ハ
徳をうしなひ。臣ハ節を乱る。是治平の昔にかへしがたし。争しく人その
信を守らず。國家の衰微これよりいたる事なし。其源ハ持氏卿の
京都の命をもちひたまはざるより起りて。又長棟菴主の持氏公の亡子を不嫁
あり。也棟実に忠あらバ。持氏公の遺子中宵か。以其の内まいりて令嗣とせ

バ。恨ミの事ハあるまじ。かくてこそ其家も隠遁すべくまたバ臣の道を
尽すとも云ふべき。然るに君の不義をなし過して。京都の大軍を引
出し。これより持氏公に生害させたまひしハ。偏に長棟の胸臆より
出るものあらずや。さまでハ一族の宛中に過ちたるものに。成氏の御赦免を
願ひしハ。其罪を悔るに似たり。誠忠といひがたし。まして成氏みな鎌倉の
御所と仰がるゝに至りては。上杉が為にし等しくせらるれバ。恨ミハ恨ミ恩義ハ
又思ひ返すべきものなり。こゝに讒者出て上杉を嫉むものゝ申さく旨に付ハ。
一時に寃忠を害しものから。大乱を両杉の根元にあらざるや。上杉方何ぞ
手を拱みて安んじて見るべき。この後ハ人情漸く疎く。朝に御所方と
なりしも夕ハ忽上杉へ投し。反覆したる模稜の手となるべし。今更其
雄を両に起り。両虎共争ハ弊に乗ずべく蹟を選ぶともかひなし。成氏を

東国を平治して静謐に致さの君よあしび。世を捨てハ[illegible]とも
とも。七孫の先祖あり是ハ[illegible]を[illegible]ハ[illegible]
家長として[illegible]家の[illegible]敵をその[illegible]
龍居日ハ[illegible]時ハ[illegible]
ふ[illegible]ハ長尾へ道とも[illegible]
[illegible]ハ如何と問ひ[illegible]
ふ[illegible]ハ一つの患ひあり。今ハ[illegible]
[illegible]おきて[illegible]我孫[illegible]
とらんとも。姉[illegible]
顕然[illegible]
長尾へ道が頃地ふ[illegible]

[illegible]
[illegible]
仁徳を[illegible]
[illegible]の軍一揆の徒[illegible]
心[illegible]
ありて関東治平の功日[illegible]
晩[illegible]
汝ハ職[illegible]
持賢ハ家督[illegible]
智人ハ[illegible]
家[illegible]

(一)太田持資武州豊嶋郡に城築く并に江山の碩學詩文章を贈る

附り河越の城を移す事

斯て後は太田持資籌策を備へ後ろんと先城地をぞ撰みける。康正二年丙子の春の頃は持資の領武蔵国荏原郡。品川の舘に在りしが扇が谷へ出仕を遂げ。時に扇が谷へ家房付て太田資清持朝の七男をもて修理大夫と称し云々寄て宿願の事ありけれバ帰る江の嶋の弁才天へ参詣し。帰路は舟に棹さしく。霞まとひける海原の沖の帆影も遥に網引き釣する蜑の業も。よそに見るも興ありく。所々の眺望すさまじき。それや神奈川をうち過ぐ。品川近くなるところ。阿母といふ魚一つ舟の中へ飛入りぬ。人々恐しく思ふに思ひ寄りて見えまたる鯆といへる魚なりけり。持資さうとひ魚の舟中へ飛びの事。異国本朝ともに祥瑞なり。鯆いとめでたしとも又古き歌にも。あづまなる家

まし伝の名乗りき。後ごと乃しろ武佐せんこもなめり。この元来すなはち九の城なり。時に於ての昔花かまたの事に我此地に城郭を築かんと思ひめぐらしなりと云へ。今夜弁才天に祈誓し。其の帰路にあり。かくる不思議のありけるは心願満足の霊験掲焉なりとて鈹に飯まてりて頻りに喜悦の躰にて先近き辺に一城を取立んと所々を見巡りに、豊嶋郡に、北なる西が原の近くに城地と成る所あり。なく人里を離れて廣狭なく、口叶はざれば経略して止みぬ〈今世西ヶ原の近山ハ西ヶ原なりとされど是は城址に縄張せし所〉日光御成道の左稲付村の自性山静勝寺といふ寺院の境内〈一説に云〉。昌坂の境(?)武蔵国途の目を従卒を連て荏土に来り。彼方此方と打ち望みしに。一箇の勝地あり。其地形高低所を得て要害よく適ひし所の首尾なし。依て縄張をなしける地の村名を問ふに村老答て曰く此縄張の中へ千代田。宝田。祝田とて三ケ村なり。千代田は今吉祥寺の旧地。宝田は同く

源八郎殿の領所なりしを。持資聞て國の名人武を藏ふゆゑ。郡の名人豊なる嶋とのゝ。民を治ふ事一とせ。村の名もおのゝ因出ゝて喝うりと恵ゆゑ。千代田美濃守。宗因源八郎を頼り。石城曳き来城築て。古城を据て。昼夜人夫の力を励まし。翌年治元年丁丑三月朔日。經營金〻成就して土木の功を終へ。

今小間馬町と云名人龍の千代田村より。まゝ〻古本村ともいひ。

千代田美濃守の住古人奥州後名ふ。澤家〻と号。馬町の黒宮を氏と称する也。

小間馬の町ふ千代田稲荷のとゝ云祠あり。古千代田美濃守の城跡なり。

[illegible]の社ふ。

[illegible]の後今の社地あゝ〻。一社ふ祭ひて千代田の社と云。

ことより持資海防ふ留ると。先春ふ東よ。美〻ぶ〻ゝ。波根ふ。畑麓ゝ。

ゝる國府の臺ふ。花の樹も勝れ。秋ふ露ふき。義野の千草ふ聚く。虫の声。西よ秋ふの山色と愛。北ゝ牛込市谷ゝ。煙る。赤塚ふ。高低隈〻よ連りて。弱の弦ゝ間。左右ゝ。流草川の流ふ源遠く〻て海水よふ入る。南ふ平地ふつゞき。三田麻布。品川ふ及ひ。海潮時よ盈虧して。行業の浦〻ふ網ゝる。その人ふ。峰声も濱打ぶ。杖の風よ。振ふ。眸を地ふ廻〻せば。富士の高嶺ふ白雪ふ。四時の佳景物〻て備ふ〻ゝ。とゝ云ふ。夏ふ置くが如く。百穀豊饒ふ。魚鹽業ふ。[illegible]ゝ。要害無双なり。渋谷五郎の萬里和尚ふ。持資ふ。親しく。夢の太のゝ。故東國下向の節。蒙城ふ来り。其地の開闢を称し。唐の社の美が

寒合西嶺千秋雪

門泊東呉萬里船

いらくふ郎ぶ吟ぶて。拔繁甘一の名誉あり。日のうぶ〜て繁花の文部會し
なるべしとやとーぶ。持資晩年餘年ふ〜ぶと城中ふ草居の室をつくる。
これを靜勝軒とぶ。又杜ふ美ぶ句ぶ摘ぶて。樓を含雪と名ぶけ。亭ぶ紙
洞ぶとらく。その頃建長寺の得公長老。靜勝軒ろ名ぶ詩を請ぶて持資ふ贈るその外五山の碩學ふ和のく詩あり。

靜勝軒銘并序

文之所以爲文不亦武之備乎武之所以爲武不亦文之
要乎其要在靜則其備必得勝也竊惟太田左金吾公道灌厥
先迺丹陽人而五六葉之祖始家相州也公觀武藏豐島
□□之地築城壘從京師運府之命爲其君而割據康正

乙亥驟胥以來二十有餘霜高揚帝旗陣武之五卜子禍
自戲下起公之爺道眞倡將帥屯兵於上陽赤城之麓河
北矣戲下兩岐相分其一者退遁嶮於武之鉢壘公在東
武綏頰慮和兩岐厥舉不能達焉遂守忠孝之至道一怒
着鞭自南馳引將帥渡河而出同於針原酣戰鋒鏑凝血
雷霆扶威公凱歌未休追而開鉢壘壘求救於東兵不日
其兵鳴鼓而相應矣公能量彼我之道息士卒於上陽白
井之南雖不及員尸之攻四面州木無悉非敵兵也當是
時堅守公之符契不祖敵軍者荏土河越二城而已不幾
東兵鼓聾之聲衰鉢壘亦潰矣公以時不可失出白井僧
率數百騎餘凌數万之敵兵直歸東武旌旗增色而後使

將帥建幟於鉢盤公汗馬之勞百戰積功獲萬全者爲天下國家而不爲私□□城於是起本也凡關以西之諸侯望風而靡者往往有之矧關以東之八州大半屬指呼矣城營之中有樊室曰靜勝西爲舍雪透賈重重之窻櫺而户巧鑿經三二尺之圓竅圓竅之中望千萬仞之富士則旦雲暮煙頃刻之隱顯昨陰今晴造次之態度作者絡舌畫閣筆西者兌也兌者澤也澤者地之潤和也兌之卦辭曰君子以朋友講習公之德澤弥溢而覃萬物之謂也東爲泊舩上下天光一碧万頃并呑數州東者震也震者雷也雷者天之号令也震之卦辭曰君子恐懼修省公之軍令弥嚴清國家賑士卒之謂也震兌兩扉之名雖小拾遺之聯其義寔係周易矣且夫靜勝二字見于尉繚子秘書也其詞曰兵以靜勝國以專勝矣施子美之解云兵法肅肅則兵得其利將權欲一一則國得其利蕭蕭之馬攸之旗此則兵之靜也劉祐攻海鹽也寂若無人楊素將也馭戎嚴整各以靜而勝也加之范景仁作長嘯亭明騎之賊遂号長嘯公夏夷之間競誦厥名長嘯則文而靜也却胡騎武而勝也公鳴鼓拍肩毫白羽提赤霄新取璧遠駕橋梁則不戰而千里外折衝公平日繫志韓三長法軍旅和氣藹然胸有識鑒神農氏藥方軒轅氏兵書史傳小說來域二十一代集貯數千有餘函而涉獵又家集十一分其類而聚焉号碎玉類題所賦詠膾炙人口昔黄河

之師揚仁叔以其堂顔靜勝趙宋之餘崇亀官至兵侍藏
書万卷扁居曰靜勝重名節輕官職有文有武百姓歌厥
德頗與公合符宜哉公以靜勝称軒矣倉廩紅陳富栽棠
而雜皂莢市廛交易之樂檐薪而換柳絮僉曰一都會也
城中之五六井雖大旱其水無縮其壘營之爲形曰子城
曰中城曰外城凡三重有二十又五之石門各掛飛橋懸
崖千萬仞而下臨無地築弓場毎旦駐幕下士數百人試
其弓千分上中下有着甲冑踊躍而射者有袒裼而射者
有跼蹐而射者及怠則罰金三百斤命有司貯以爲試射
之茶資一日之中操戈擊鉦閲士卒兩三回其令甚嚴也
予東遊之次駐草驢於東武者連歲公需書靜勝之銘厥

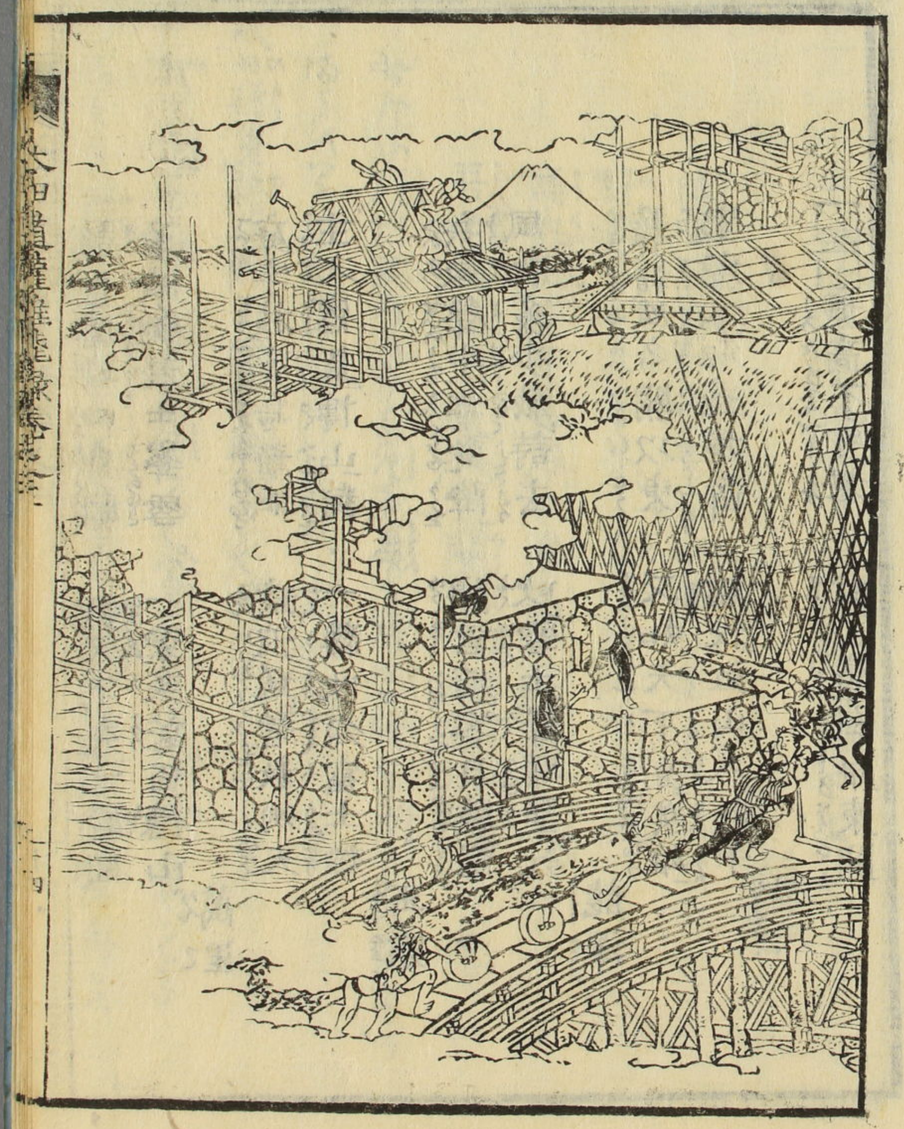
義不可拒也營中之風致筑波之遠望隅田之晩眺一一
載村庵蕭庵二老之叙跋（二老の叙跋新編淵倉志巻の二 産物志佛の條下に見へ）故重不毛舉
公要以闡左之諸老所作若干首及予一篇同掛壁間與
洛社之詩板水月相映可謂千載下之美譚也銘曰

静爲天德　維天何言　勝爲地勢　維地有源
東呉西嶺　万象一軒　仁者必勇　信況及豚
鐵鑄壘壁　能守弥敦　松茂柏悅　子子孫孫

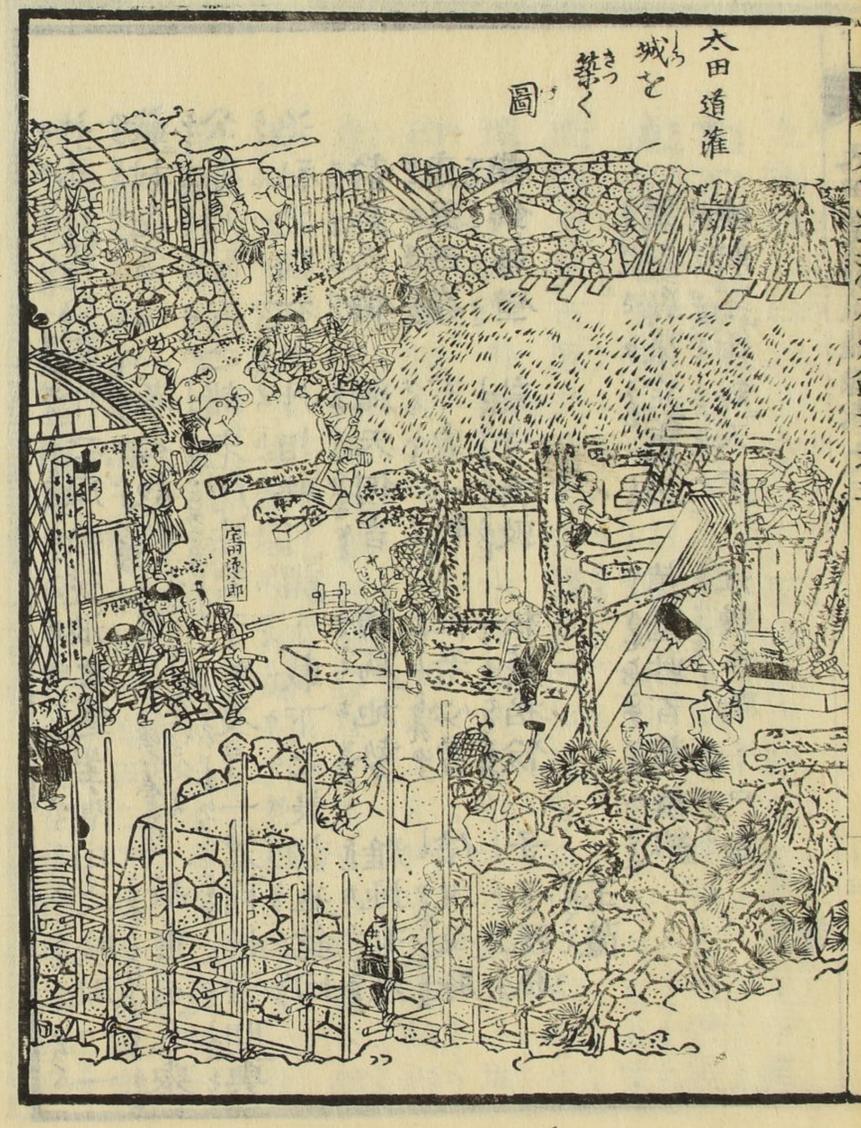
玉隱

霜鬢歸來定東洲　指麾此百萬貔貅
幽軒不出知天下　江碧白鷗千戸矣

空雲



太田道灌城を築く圖



靜自勝時心自閑　鍾天下秀寸瞬間
滄波倒浸士峯雪　一朶芙蓉百億山　萬里
庭宇枝安烏漸眠　遠波送碧數州天
主人窓置博山對　一縷吹殘富士煙　正宗
兵鼓聲中築受降　聞君延客日臨窓
風帆多少載詩去　吹雪士峯晴墮江　龍澤
藉藉威名關以東　又知天下有英雄
鼓聲不起邊城靜　驅使江山入彀中　横川
□□城高不可攀　我公豪氣甲東關

三州富士天邊雪　叔作青油幕下山　靈彦
傳聞靜勝軒中景　四面窓扉一一開
野濶青丘呑帶芥　天晴碧海望蓬萊
高帆似自平蕪過　漁火如從遠樹來
吾老無期泊船處　閑心西嶺雪成堆

此外に狂詩歌の少々を載せ書の
傳へ所多し〳〵。
或日持資擔ふ勝を四方を眺望し〳〵て。
我が詩を打ち出づる海ちく〳〵富士のすそ野の
ちぐさ野のすゑもひろのみどりの白雪

当城の傍。平河の辺に一ッ乃池水ありて。いかなる旱魃にも涸る事なし。これを小川の清水といへり。今は水の跡となれり　むさしのの小川乃ながれ絶ずして岩の根芳をあらひしと歌にきこえしも。此吟詠せし。同年扇が谷の定正。其子五郎朝良此とき十四歳なりしが征伐んとて。當城攻を持資に属へ。持資策して。河越の仙波の城を築して縄張を改めたまひしかんとすべきより。翌持資に命じて三芳野の郷にありし要害乃縄張悉く繕ひて。新に城を築き。日あらずして成就せり。持資城の四辺を巨細に巡見せらるに。當城の北にあたりて鎮る乃社あり。これ三芳野也大政威徳天神なり。これを三芳野天神と称す。いつの時より此所に鎮座ありけるか。社務神職をよびて問けるといへども。その由縁をしらず。神体は剣にて造りたる五本骨の扇を安置せり。宝前の鏡も是れ扇を画きたり。持資謹しく

再拝し。家臣に向ひていひけるは。當社乃由来よし具に司るものなきに知られざれど。他より何ともいひがたし。今唯当然の理をもつて思按をめぐらすに扇の用たる。風大虚に起りて。あらゆるの花葉これがために悉く散乱させらるれば此城に寄来る敵を追ひちらさん事。風にあの葉をちらすがごとくならむ。神慮を添へたまはんやと祝しけるべし。皆々喜び申し。かくて彼大門より六町ばかり。榎の並木を栽て北野の右近の馬場に准へける。猶も聞く越路よりわたり来たる雁は先此社の辺るより鳴初るとぞ。在五中将のみよし野のたのむの雁と詠じし名所なり。又乾の方に氷川大明神乃宮あり。土俗は業平乃廟ありといへるは誤りなりて此御神は進雄尊にして武の祖神なりと神主のものかたりし。則ち方一振神馬を奉納し。酉の方は宇佐八幡の宮なり。持資系緒して神職をつかはせて世に伝ふるをもむきにては平家の

氏神と仏得しゝ實あるやと問へ。神職答て。それハ傳統めてゆゑなり。宇佐の縁起史ハ中神ハ田心姫命。市杵嶋姫命。滝津姫命。市杵嶋姫命なり。これと三座崇あらゝかなりて。豊秋の國ふ在る所の宇佐宮とまうす。光和天皇宗像の社。安芸國嚴嶋の神を勧同じ。其後十六代の帝。應神天皇を國殿よ祀りまうす。八幡大神とまうす。山城國男山よまつりまうす。正八幡と称ま。八幡宮ま元一躰なり。何そ宇佐八幡。正八幡と二座あるぞ。宇佐ふあるゝ時ハ宇佐八幡なり。ま平ロ一ゝ。お資九と感伏ま。又南ゝあるて仙波といふ。和尚。往古仏人の住ま。四郎あゝ紙。慈覚大師一字紙建て。星野山無量寺ゝ号ゝ。本尊強陀如来ゝゝ。中興尊海和尚なり。北院中院なと始ゝて。三十四箇の塔頭あり。常見行よ山王權現の霊社あり。お資殊よ信仰の神なゝ。奉幣ゝ神寶ゝお附ゝそれゝゝ荘土へ回流ゝゝ上枝朝良ゝ城ゝ修ゝ。ゝ後持資荘土ゝも河紙よ使下て。よ五接現ゝ城の西よ祀ま。ゝ芳ゝ天神ゝ西河よ移ゝ

文明十年の秋道灌見夢ありて社ゝ建て稲荷ゝ勧請ゝ祀られゝ。渡ゝ天神ゝ。其北ゝ香月亭ゝ。又氷川明神ゝ移ゝ。ゝ田安明神ゝ草創ゝ。神田明神ゝ往古ゝ社ゝ。殿座ゝ。ゝの神ゝ奥験ゝゝ。常盤堅盤ゝ祭祀ゝ。神威日ゝ進ゝ。ゝ繁ゝ。持資新ゝ神仏ゝ崇敬ゝ能ゝ民ゝ撫育ゝ。扇ゝ谷の勢ゝ朝陽の昇るゝゝ。荘土河紙の二城ゝ始ゝ。ゝ。神祇巻槻巻社城ゝ築き。その外ゝ。ゝ巻ゝ設けて兵士ゝ備ゝ。市所方ゝ山内ゝ。ゝの防禦の為ゝ。

東常縁京都の命ゝより。下総へ下る。并びゝ馬加落城附ゝ南國の將士ゝ作ゝ。ゝ韓ゝ社事

其頃京ゝ義政公の近侍ゝ。東下野守常縁とゝ人あり。

後は遠國なりて氏とも。こゝに千葉常胤が六男東六郎大夫胤綱が嫡流ゆく下總國東の庄三十三郷を領知し。その家八代く系統を存りて勤仕をふるふ今度千葉の家二流とあり。總及大弘はおのゝ〳〵まく。急ぎ罷わり一家の族を催促し。馬加入道を退治しく。實胤を千葉へ陽とへき上日。佛教書殘草し。濱式部が補玄利をお眞〳〵下總ゆ下向しく。一族國人はお觸くまへ國府。大須賀胡馬を好め常緣よおもこゞへき勢を令せて歩常緣なる加の城へおし寄せ。嵩〳〵攻ふ是バ。京越後なるもゆて出一日一夜陣ぎまく〳〵ふとらくども。終ふうも負け千葉をさ〳〵て引退く。代執ひゆや怒れくん。上總の國よ所く羅ゞくありきるふ敵味自為玄せ〳〵バ濱式部ゆ補と東金乃城ゆ籠め。常緣を東の城へそゆりる。扨又成氏ハ武田。藥田。一色。鳥山なるよ三百余騎をさ〳〵緣へ。康正元年十二月三日武藏國

埼西の城を攻めらる上杉。廳鼻和。長尾。武蔵七黨の衆上ども。殿先を揃くて切く出陣ざたく〳〵ふりぶらくり鳥倉幡集の驅武者西ゑ金綾の沛所方ゆ切〳〵まそ引退く。同月六日沛所方より丹〳〵ゆ出て攻ふるよ〳〵。城を攻めおくまを上杉方牧百人対〳〵て敵軍とぞゆふゆる。ゑ〳〵まども下総の合戦ゆ。加への道。京越後守毎度常緣よ負け。故千葉中務入道了心が息男。實胤と千葉介胤ごりと。本領を安堵さ見し。舊師新市川の城よ大勢ゆ楯ごりるより。同え〳〵まバ成氏ゆ南圓書助。藥田出羽守その外美勢とさ〳〵向け合戦よ牧度おゆおバ。康正二年正月十九日終よ濱城と。これよりて實胤ハ武州葛飾郡石濱（今の市川）へ濱ゆき。自胤ハ同郡赤城へ移る。さまバ扨總の名主おゆくハ成氏ハ降ゆ〳〵ゆ。ひとゝゆあるよりて。関東八州不くの合戦止む事なくおのづら

修羅の岐とあり。行きて農まを耕作するあくつぼ。茶田を野し
米穀けば飢饉疫疠流行し。日く疫くる餓死するもの数を知らず
又上総国へ武田信長入道甘入て。鹿南の城望陀郡谷の城を攻
又[illegible]谷と去里谷和泉守武宗[illegible]
後又[illegible]
押領せと。これ不カ[illegible]て藥田河内守八関宿より出勢して武蔵の[illegible]
郡[illegible]掠略して市川の城を攻る又上杉の方あても。こ浦分義
同八こ浦より起りて。相列中郡長尾の城を攻く迫ると奪八大衆安
樂斎八道又るへ行の下より小田原の城ごゑ長尾を押防を
武蔵国上杉憲信入道性順其子右馬助房朝と云ふ門国人見八対て出上列
乃味方と引合い武蔵乃深谷の城を攻る 信濃古河へ[illegible]成氏八
[illegible]を聞とひ〳〵敵より呼紙きめさせ。同年十月十七日鳥山在系亮

高国情寺と魅〳〵〳〵。二百余騎の勢紙ち〳〵遣のもと上杉方も関郡孔
雀へ出合ひて。とく紙事途と挑たくろへさるふとりて上杉方出井草た
湯口尉久下。和元をたのもと[illegible]孤立ふ付ふ[illegible]塞く紙出を御
所方八一戦ふ敗を退ひちしとしるども。一方の大将る山右馬頭痛を
と被りてその疵ふ死〳〵ろ〳〵れば。東の陣へ引入も然るふ上杉方へ
上杉新田の岩松ふ弟金井新左衛門已下。荒手の者弛かりしるべ者
大ふ勇気紙奉し。羽継原へ出張して陣と云ふ古河方と[illegible]と[illegible]
合戦をとゞめの軍八半角なりしが。二度目ハ[illegible]ふ御所方ふ奪ひ。
[illegible]と郡へ引退く。下総ふ上杉八東常縁と馬加入道。[illegible]
亂と不〳〵ふて合戦し。勝敗互ひふ[illegible]
絶る間もなく。いつ果ふ[illegible]

○足利政知東國のうち武命ぜらるる下向の事

備後の京都東山法住寺にて。東の常緣を召しせらるる為。長祿元年六月廿三日。渋川左馬頭義堯。足利義氏十代の孫。渋川の探題。義堯の二男なり。と云ふ。として武藏國へ下さる。是は將軍家の家門なれば。殊更。畏き滿頼の久しく武藏の國司にて。其ときより足立郡蕨といふ所に居住して。今あたりは世に公領すべき人宜しからざる。別氏族を探題として。ひたすらの謀反武藏上野の諸士等。成氏を追討して。上杉とのしの如く管領とあり。關東を治むべき旨を命ぜらるる。因氏扶命大和守先達て下向し。改田を中ゝ上杉方の西へ渋川の方へ独立し参會して。足郡ちうの中知を集り會合戦の用意をなす。田賢清父子の者共在河越城に城の協ふ。兵糧を蓄め其備嚴重なり。すなわち義澄事緣より

武藏相模兩國の兵士等に下知すると云ども。東國の者ども。尚も成氏を捨てて京都の命を用ひざるべしと。如何ゆゑ。

將軍家乃公逆方を一人關東社へ下し給ふ。その中部ふ。

靜謐を求めんと諸家より言ひ出でるゆゑ。京都にも從ひて。

発る。ゝ。義政公の出金寺香嚴院殿と中て天龍寺ゆ。

長祿元年十二月十九日。二十三義ゆく還俗なり。第廿左馬頭政知と改ち

さ甘ゝ。上杉中務丞紀上使として。因治紀中補改憲南作なる。

布施氏紀を補。本戸三河守孝能。因治紀中補改憲南作なる。

あり。伊豆國三島まで来給ふ。大明神へ社参あるとて。

ゆゑて。元服の式なり。加冠は本戸三河守孝能。

なり。汀孝能は冷泉中納言持為卿の門弟なり。

和歌を係し當社へ奉納して。新市の市武運を祈る。

我が君のさろえんゆひ芝、まつ安ゆ。千代ふるまでのちゝろ形るまつぶ

ゆ。同人の集ゆも見えたり。然るに源金吾市助安燒の後八幡社

とたり。新くしべき不もあり。要害もあしく。敵地も近ければ。

伊豆の北條城越とりて所へ仮り屋敷を建。保をく忠を領知とへ

先陣代々と二枚改寄。組頭を紙えとく武臣相頭より臣の一揆をおそ

て上仮房頭ゆ力を合せ〳〵ふ。房総ゆ去なる源より武臣卒みゆ陣を

て。成氏方の者と日夜の合戦或ハ小迫合ありて勝敗定まらぐと。たゝびゆ

戦ひをしを侍。

大田道灌雄飛録巻之三終